

中川喜雲・人とその作品

松 田 修

中川喜雲は二流の人である。俳諧師としてはもとより仮名草子作家としてもその足跡はむしろ微かと称すべきである。しかし、このような二流の人のささやかな積みかさねが、文学史の展開を可能にしたのである。それを裏がえしにしていえば、文学史の闡明のためにはこのような日の当たらない作家にも目を注ぐ必要があるということになる。それにしてもこれはまたあまりにも安易な、報告というよりもむしろ覚えがきにすぎぬものであるが――。

喜雲の携った仮名草子も、名所記・咄本といえ、もうその活躍を必ずしも狭いものとのみいいがたいであろう。多方面な仮名草子の中でも、最も当代的なジャンルに、最も早く鋏を入れた一人で、喜雲はあった。その文芸的成果はしばらく措き、それは今日の的なものを選択する彼の感覚の正しさを物語るものであろう。その喜雲の新しさは、先蹤はいくらでも求めうるにせよ、彼がその名所記なり地誌なりを、新しい時代の詩である俳諧に結びつけて形成、出版した発想法においても裏書きされるはずである。

そんな喜雲の発想は、当然、新しい美文――俳文の創造に関連するであろう。その新文体は、しかし、序文やかぎられた項目にのみあてられ、名所記や咄本の大部分は、平板な叙述に終っていた。それは喜雲の美文意識に（何が美文であるべきかという意識に）及ぶ問題であり、たとえば山岡元隣のよ

り自覺的な成果と対比すべき問題でもあろう。

むしろ、俳諧を除いては、喜雲の文芸は成立しなかったという方がより正確ではないか。事実、彼の伝記は、俳諧師として、俳諧の側から主として考えられて来たのである。

問題はじつはそこにある。まず俳諧側の発言を起点として、彼がどのように素描されて来たかを辿ってみよう。

一 喜雲の年齢について

喜雲の伝記については、「俳諧作者名寄」は、簡略に、貞室門「京童部」著者として記載しているのみである。「俳諧家譜」には、貞室門、芸州広島の人、京都に住み、山桜子と号し、没年不詳としている。

「俳家大系図」は右を襲って、やや詳しく、「案ズルニ延宝中歟。寛文七年〔跡追〕ニ高年ナルヨシ見エタリ」としながらもなお没年不詳としている。しかるに、角田竹冷関「俳諧年表」（明治三四年）には、宝永二年の項に次の如くある。（さがせばもっと古くさかのぼりうるであろうが、手もとの資料だけで一応ものをいっておく。）

宝永二年 喜雲没 十月三日、 享年七十、中川氏、山桜子と号す。季吟門、京都の人。

これは抛りどころあつての説であらうか、以後の俳書はこの説を襲い（平林・大西「新撰俳諧年表」など）、ひいては『近世文芸叢書』名所記一の解題（明治四十三年）にもそのまま引かれ、「列伝体小説史」や、新しくは小高敏郎氏の「松永貞徳の研究」続篇にもとくに生没については全く疑われなかったのである。ここには、年齢と師承の問題があるが、まず年齢から始めよう。

宝永二年（一七〇五）七十歳没が正しいとするならば、喜雲は寛永十三年（一六三六）生れとなり、「京童」出版の明暦四年（万治元年—一六五八）には二十三歳となるであらう。（「列伝体小説史」は二十四歳とするが、誤算である。）しかし果してそうであらうか。喜雲著述の内部に立ち入る時、宝永二年七十歳没説にはにわかに従いたいものがある。

たしかに「私可多咄」（万治二年—一六五九）には、「昔予弱冠のころ愚父とさがにまかりし事有いにしへは云々」とある。この嵯峨遊覧を「京童」執筆のため、あるいはすくなくとも執筆に関連してのこととして、明暦四年の直前、最大限三四年以前に、弱冠——二十歳前後であると考えれば、「京童」出版時に二十三歳という通説からの算出と、矛盾なく合致するのである。しかし、「私可多咄」にいう嵯峨行が、「京童」出版直前、最大限三四年以前であつたという証拠はどこにもない。

たしかに喜雲は父と嵯峨に遊んだであらう。そしてその年は弱冠二十歳であつたろう。しかし、その紀行の時期は「京童」出版時から、可能性としては、十五年、二十年以前とも考えられるのである。たしかに、明暦、万治の交、いわば華々しいデビューをした喜雲の年齢を、二十代の前期として考えることは、誘惑的である。水谷氏の如く彼の落魄詠歎に思いあわせて、「斯の如

き素性、斯の如き熱情の人であつたから喜雲は、少年の頃より家名を顯はさんとして孜々として学び励んだものと見えて、早く文名を成すに至つた。『京童』を著した時は、実に彼は二十歳の青年であつた」と感傷することの前に、その花ざかりの陰翳をまず検証するべきであらう。

すでに「大系図」は前引の如く、「跡追」二高年ナルヨシ見エタリ」とのべている。「京童跡追」卷一にはたしかに、「今此ふし老の身の甘なひぬるに淡く覚えて」とある。「老」という上は、すくなくとも初老の四十歳であらねばならぬ。しかしこの年寛文七年（一六六七）には通説では三十二歳なのである。当時のことゆえ、「老」のことばは必ずしも今日的な「高年」を意味しない。しかし、四十歳には、達していなければならぬ。

さらに同書の序に、「予^つ莊年の比明暦戊戌歳大内のめでたきをあふぎ奉りしより、洛陽のほとり神たち仏たち霊地のよりきたる事凡書よせ、京わらべと題号せし草案を人にほり求められ梓に行ひけるに」とある。壯年の意味内容が当然問題であらうが、弱冠・壯年・老と喜雲の用語を並べる時、その指す所を原義的なものとして考えられるであらう。字義通りに、壯年を三十歳とする時、壯年の頃の「京童」出版は、三十歳の前後において考えられるはずである。かりに明暦四年に喜雲を三十三歳以上とするならば、万治二年には四十二歳以上となり、喜雲のいう「老」に対する矛盾はないであらう。そして三十三歳の喜雲は、その「むかし」十余年前二十歳の頃に、父と嵯峨に遊べたはずである。便宜上喜雲の歳を、明暦四年三十三歳として略年譜を作れば次の如くなる。

年 号	紀 元	通説	小見	事 項
寛 永 三	一六二六		一	
寛 永 十 三	一六三六	一	一一	
明暦四・万治元	一六五八	二三	三三	「京童」出版。
寛 文 七	一六六七	三二	四二	「京童跡追」出版。
宝 永 二	一七〇五	七〇	八〇	没か。

しかしこれのみではなお不安である。ごく例外的な、あるいは喜雲個人の誤用としてなら、たとえば壮年を弱冠と同義に用いることも可能であろう。またたしかに喜雲自身のことばであつても、それが真実か否かは、検証の要がある。とくに、通説なるものの根拠を確かめえぬだけに、不安はおおいがたい。他に証言はないであろうか。

柳亭種彦の「京わらんべ」の書入れ(未見。鈴木行三氏による)に、「喜雲が江戸に遊びしは慶安の頃なり。みち草江戸下りの紀行なるべし。赤てぬぐひ。奈良刀。南都に赴きし紀行なるべし、此三種承応前の著述なる証あれども未見」とある。

これは有力な手がかりである。この三種の紀行については、「京童跡追」巻三(大和国の名所記)の冒頭「春日」の項に、次のように記されている。

予央すぎ侍る比奈良にまかり春日の禰宜高畑に侍り、渠がもとに宿さため、日を経てここもかしこも見めぐり、日記作りて外題を奈良刀と云、わざの鈍ければ也、此内にかきこめし狂句共、今とり出てついでよくここにうつさんと、見侍れば

多くは同吟あり、此奈良刀の草藁は、若かりし時もたびたび薪の能など見にまかりける比、発句つかうまつり、長頭磨添削の上にて函底に打をきしまま、あつめて一小冊となし侍るを、(中略)武陵におもむきし時、みちぐさと名けし一冊、又赤手拭といふ菓子、これは宇治見物のころ書つづりしを、袖中に携へ翁のもとにゆき、一返直に読て、老耳をかたづけられ(中略)付墨懸斤ありしも(中略)、愚句は廿年あなたの事にて侍る(下略)

ここから明かなことは

一 喜雲が二十五歳を過ぎる頃、「奈良刀」を作ったこと、それは、二十五歳以前の度々の奈良行にえた句稿を貞徳添削を経て集めたものであること。

二 喜雲の江戸行による集を「みちぐさ」、宇治見物の集を「赤手拭」ということ。

三 これらは貞徳の添削をうけたこと、その時期は二十年前以前であること。

の三項目である。

「京童跡追」は、その序に従えば、万治二年に一旦成りながら、十年函底に蔵せられて、寛文七年に至って日の目を見たのであつて、その本文には、当然万治二年当時のもの、「寛文七年夏の五月このあとをひ清書の時」の新添部分、さらには「奈良刀」「赤手拭」利用の部分わけられるのであるが、この「春日」の項は、旧稿を参照しながら新添した個所であること疑いなく、したがって、ここにいう二十年前は、寛文七年を起点とする、正保四年(一六四七)頃を指すものであろう。この正保四年には、喜雲は通説によるかぎり、十二歳であつて、いくら早熟児でも、江

戸下りの紀行文などは、考えにくいのではあるまいか。小見によるかぎり、このころすでに二十二歳以上ということとなり、無理は消えるようである。「奈良刀」は貞徳添削のものをまとめて一冊にしたのが二十五歳を過ぎる比なのであるから、草稿時代は貞徳死没(承応二年)以前のことと当然決定できるが、しかし二十五歳なる成稿時の、正確な年時は決定しえない。種彦が、三書を承応以前といった証拠はどこにあるのか、いまだ理解しえないのであるが、おそらく三書を一括して貞徳生前になったものとして、そのように考証したものであろう。種彦のように「奈良刀」の成稿時と草稿時にずれを考えないならば、当然承応二年以前に喜雲は二十五歳を過ぎていくこととなるのである。通説では承応二年十八歳、小見では二十八歳以上となり、種彦の考えに無理なく重なるであろう。

明暦四年壮年の頃をかりに三十三歳として前述喜雲三部作の製作年次を考えると、喜雲はおそらく正保の始め二十歳前後(通説十歳)から貞徳に親しく教えを受け、正保三四年頃には二十二、三歳(通説十二、三歳)で、「道草」・「赤手拭」・「奈良刀」の草稿を作り、慶安三年(一六五〇)二十五歳の頃(通説十五歳)「奈良刀」をまとめたものであろう。そして三十三歳(通説二十三歳)で「京童」をはじめて出版し、四十二歳(通説三十二歳)で、「京童跡追」を上梓したことになる。このように見れば、喜雲没年に関する通説の従うべからざることはほぼ明かであろう。「弱冠、壮年、老」の用語に始まる喜雲年齢への探究は、しかし大略通説に十齡以上を加えることで落着いたようである。これによって喜雲のイメージはじめて正道に立ちえたのではあるまいか。彼はどうかやら、二十歳をこえたばかりの若年

で、「京童」を出版するような、はなれわざの持ち主ではないようである。再びいう。私は通説の根拠を知らない。したがって小見は、その無知の上に成立しているのである。

二 喜雲の経歴―その出自と師承

右のように、喜雲の伝記のうち年齢の問題が、ごく粗雑ではあるが整理されたと思う。これらの上に立ってさらに彼の経歴を、限られた文献に従って、辿ってみよう。一応、前述のように、便宜上明暦四年三十三歳、寛永三年生れとして、論を進めることにする。これはどこまでも便宜上のこと、その前後に数年の幅をもつものである。

喜雲を芸州広島島の産とすることは、後の中年以後の、「田舎わたらひ」を誤解してのこと、いうまでもなく、丹波国桑田郡馬路村の産とすべきであった。

そもそもやつがれは丹波の国馬路という村にそだち(「京童」序)

亀山と申は亀山の法皇すませ給ひし御跡なり、さて又此嵐山には古へは城廓ありし也、今も礎は残り侍るによりて城主の末葉こしかたしたふ也(「京童」巻六)

昔予弱冠のころ、愚父とさがにまかりし事有、いにしへはこの嵐山の城主は、わが先祖のものなりしが、今は城郭さへあとなく、石ずへ井戸のかたちばかりのこれり(「私可多咄」

巻二)

「丹波田作末葉漫書」(「鎌倉物語」跋)

これらから彼の本属を丹波の馬路村とすることは、疑いなきところである。

馬路村の中川氏とは、太田亮氏所引「中沢根元記」によれば「中川の縁流なりとて、中川出羽守、同苗駿河守、人見但馬守等の武浪当所に来る。其の一流の人、今十二人、是を馬路村の郷土と定む」とあり、清和源氏義光・頼範両流の中川氏はここに根をおろしたもののらしいが、中には石田三成に仕官したものもあり、その運命は一樣ではなかったようである。ともあれ馬路村の中川各流を辿って、中川仁右衛門重定、その子重徳の名を求めえぬことはいかがであらうか。しかし系図といえども完全ではない。中川本流は郷土録左衛門の子、元立命館学長中川小十郎氏に至るが、かつて友人若林重栄氏にお願いした調査によれば、小十郎家においてすら早く蠹魚の災によって完全ではないという。だが、それはともかくとして、中川各流を溯って、嵐山城主であったものはかつて痕跡を止めていない。

嵐山城とは永正四年六月香川又六が細川澄之を奉じて抛り、敗死した（「二水記」）古蹟であって（「雍州府志」「羽二重織留」等）ここから種彦は喜雲のいう「先祖」を香西又六とするのであるが、香西氏はいうまでもなく讃岐の大族、丹波とも馬路村とも関係はない。ただちに香西又六を喜雲の祖とはしがたい。しかし嵐山城に中川姓某の抛ったという記録は、現在のところ見当らないようである。あるいは喜雲の責任ではない家系伝説を、ただ祖述したものであるかも知れぬ。事の正否は必ずしも問題ではない。訛伝であるかも知れない家門の栄誉の、そのあまりにも微かな残照に寄せる、喜雲の感傷の深さと、その感傷が可能にした名所記における自照性が問題なのである。

おそらく中川一族は、文明十二年の丹波徳政一揆などを指揮した、丹波の国人・国衆であつたらう。そしてその多数の側には、

没落も予定された道であつた。「儒職家系」巻二人見譜道嘉の項にいう「（天文）十四年三好長慶之兵襲馬路^二道嘉兵尽矢竭立戦而死」、道西の項にいう「父道嘉戦死時、道西年十五、馬路之諸族皆敗散」を思いうかべよう。天文二十三年堀の内中川落城し中川重綱夫妻戦死せることも、より新たな記憶であつた。虚構か訛伝か、真実か、喜雲のいう嵐山城主の没落も、このような弱小武人淘汰の一環であつたらう。先祖はともあれ、父重定は、おそらく一旦は仕官した身であつた。そしてこの丹波の郷土は、郷土出身の浪人は、過去の光榮をおもいつづけることのみでは生きられない。「京童」序にいう、「甘艸と黄耆をかみわけたる門にいて、病のおこりをかながみれば」——喜雲のとつた生活の道は京に出て医者になることであり、それはたとえば前引の、人見道西の子友徳が、さらにはその子玄徳がえらんだ道であつた。そして医師としての生活でみちたりぬものを、俳諧で、さらには名所記、咄本で、みたしたのではなからうか。（もちろん、当代医師であることと、そのような文芸的、むしろ芸能的生活とは、重なりあうものであつたが）

「滑稽の事にたづさはればあふぐにたかし」——そしてこのような没落による転業、さらに趣味的なものへの傾斜はひとり喜雲にのみの必然ではない。父重定のすさびにもみられたことである。又たとえば「口真似草」に入集している「丹波中川氏正庵」などもおそらく喜雲の一族であらうが、やはり俳諧にたずさわつたのである。田紳として郷土にあるものにも、知的自由業に生計を求める者にも、共にその風雅には、風雅以外には自己主張の道を奪われたものの悲願めいたかげが感じられるであらう。（丹波の郷土の鬱屈せる志情は、長く尾をひいて、明治維新における山

国隊の行動となって顕現したのである。）

ともあれ、喜雲が貞門にはいったのは、何時であろうか。彼が貞徳に親炙するに至る経緯に父重定の存在を忘れることはできない。重定が貞徳や小堀遠州と交わり、狂歌や俳諧を嗜んだことは、あたかも貞徳における永種のごとき意味づけを要求するであろう。ともかく喜雲の最初の師は喜雲自身の証言による限り貞徳であった。前引「京童跡追」の省略部分にも次の如くある。

かうやうの句、むかしむかし貞徳翁に見せ侍る時、愚作は能役者と結句に置けるを、翁の了管にて、能太夫しかるべし、三の句直して墨引べしと、珍重といふものうけたまはりし、御祭の句はそのまますべしと、吞盛といふものに仰せて、其後見せ侍りしとき合点なり、懐紙ども今に所持し侍る。

寛文七年の喜雲にとっても、貞徳はどこまでも先師であった。それは十分に利用価値のある経歴であつたろうし、圈点の部分など、自らの証言における物証の存在をことさら句寄せたものであるかも知れない。

そしてここにいる「むかしむかし」は前述の如く正保年間であり、多分二十歳前後の喜雲は、貞徳に親しく接していたと思われる。

そしてその関係は、貞徳没の承応二年まで約十年はつづいたものであろう。もし十五歳頃からの入門とすれば、約十五年間の師弟関係であつた。「貞徳百句^{独吟}」末尾の喜雲あて貞徳書簡によれば、ほとんど貞徳は、友人の礼を与えているようである。

小高敏郎氏は、喜雲の年齢を通説に従って明暦四年二十三歳とすることから、この「百句」の成立年代を次の如く推論された。「即ち貞徳が歿する承応二年でも、重治は数へ年十九歳

である。一方重治は瓢箪の独吟百韻を作つて添削を乞ひ、また奥に狂歌を書きつけたりしているから、少くとも十五歳以上の年齢となつていたと思はれる。従つて、本書の成立は貞徳の歿する承応二年を五年とは溯り得ないから、彼の最晩年の作といふことになる。」——しかし、小見によるかぎり、貞徳没時、喜雲は二十九歳であるから、この「百句」の成立年代も、寛永十七年頃から承応二年までの十五年間にひきかばされることになろう。すなわち、貞徳年譜はほんのわずかばかり修正を要するのである。

このように貞徳に親炙した喜雲はこの正保年間に「道草」や「赤手拭」を前述のごとく述作し、「奈良刀」も、やや遅れるとしても同じくこの時期に成稿していたものと考えられる。俳諧を中心とした紀行文集を正保という時期に三編用意していたということは喜雲の着眼の、凡ならざるを示している。

江戸下りの「道草」は、喜雲の行動半径を示すもの、「鎌倉物語」はかく十年以前に準備されていたのである。

喜雲の最初の師貞徳が承応二年に没したあと、喜雲は貞室に近づいたものと考えられる。「京童」や「跡追」に見られるその保守的俳諧観、貞徳への信仰的敬意からも、貞門跡目として最も貞徳に忠実な貞室に親しむことは当然であつた。貞室撰の明暦二年刊「玉海集」に父重定が一句、喜雲が六句入集していることはすでに周知の事実である。

さらに天理図書館蔵の「知足書留歳旦帳」の明暦二年元旦の項に重頼・安重・喜雲、宗恵・安重・喜雲、喜雲・安重・重頼の三つ物が採られ、翌明暦三年の項には、喜雲・恵佐・貞室、貞佐・喜雲・貞室、元春・喜雲・貞室、寿硯・喜雲・貞室の三つ物が書

きとめられていること（野村貴次氏示教）は、彼の俳壇における活躍を示すものであろう。貞室に彼がいわゆる師礼をとったかどうかの問題では、決定的なことはいえないが、「玉海集」の「富士を見て」の一句に「愚判」とあることは、貞室が喜雲俳諧の添削をものしたことを物語るものである。したがって、在来の「作者名寄」「家譜」「大系図」の貞室門下説には、根拠ありといつてよいであらう。後述するが「跡追」巻四「天満天神」に、喜雲が撰した「四季もわかたず作者も次第不同」の発句集に、貞室が二句貞徳と同数とられ、しかも貞徳の巻頭に対する、巻末にあることは意味深い。「歳旦書留帳」に出た人名でここにとられているのは貞室・重頼・宗恵である。それにしても前引角田竹冷閑「俳諧年表」以来、俳諧史・小説史両面から信じられて来た季吟門下説の裏づけがこれら諸書に全くないことはいかがであらうか。この「跡追」にも季吟は入集していないのである。季吟門とすることは、たとえば「続山の井」などに見える中川宗敏などを誤ってのことであらうか。（ついでながら、「続山の井」は「ゾクヤマノイ」と訓まれているようであるが、「弁疑書目」の読曲書目はわざわざ「シヨク」とよんでいる。一考すべきであらう。）野村氏におたずねしたことであるが今日までのところ季吟研究の側からは喜雲のかげは見当らぬという。

さすが種彦はいう、「喜雲俳諧は貞室の門人たり。又貞室の師貞徳の教を受く」と。喜雲の師承に関して、この種彦のことばにつきるのではあるまいか。

三「京童」「鎌倉物語」「私可多咄」

明暦四年、彼の処女作「京童」は出版された。江戸下りの「道

草」宇治の「赤手拭」奈良の「奈良刀」共に函底に眠りつづけて、まず王城の地京都の名所記が出版されたというこは、名所としての京都の比重を考えても当然のことであった。そしてこの草稿もまた、おそらく一度に書かれたものでなく、趣味人喜雲が、何度も足をはこんで、書き溜めたものであろう。机上に成るその以前に、嵐山行にみられるごとき遊行は、おそらく必ず成されたと思われる。あるいは眼疾をのべ（因幡薬師）出自をのべ、連歌作法をとき、ぬけた歯の再び生える法をちらつかせる、そのような夾雑物を含みながら、そのゆえにそれは読み物でありえたのであろう。地誌としての実用性にとっては、俳諧や狂歌も実は夾雑物であった。しかし名所記としての実用性には「文芸」が不可欠であった、そして喜雲における文芸とは、狂歌・俳諧や、雑学にほかならなかったのである。さらに喜雲において忘れてはならぬのは、そのような文芸的実用性のほかに、たとえ微弱であらうとも、地誌的実用性への顧慮（命日をしるし、祭日をしるすなど）をはらっていたことであった。又彼の姿勢は本質的には保守的であり、逃避的安易さにあつたとしても、その時たまに示す懷疑的諧謔は（仏教界にむける批判）、彼の魂そのものが全くは眠っていなかったことを物語っているのである。彼は自らを語るといふよりはむしろ自嘲において語っていた。「洛陽名所集」の山本泰順が、その悲劇的運命に対する何の予感もない手ばなしの詠歎——自己表白をしているのと比較すれば、喜雲の屈折と陰翳にこそ、よし文芸そのものには高まりえなかったとしても、文芸への可能性が孕まれていたことがわかるであらう。「京童」に遅れること僅か一箇月の「洛陽名所集」であった。そしてその構成は遙かに「京童」を凌ぎ、京都の名所記としての首尾ははじめてここに一

貫したと思われるが、しかも「京童」あって「名所集」の名のないことは、単に絵風の問題や（浮世絵風か狩野派か）引用韻文芸の問題（「名所集」はもっぱら和歌・漢詩を引く）によらない。それはそのような形式をこえて、形式をうむものにかかわる問題である。そして「京童」において今みた諸傾向は、喜雲の著作の根本的な支柱であった。

喜雲は「京童」を上梓したあと、直ちにその後篇を計画したようである。しかしそれは一部の本として刊行されるに至らなかった。そしてその代りに全然方角をかえて、翌万治二年七月「鎌倉物語」が出版されたのである。その成立事情を、喜雲は巻一冒頭において次の如く述べている。

一とせ花の都より月のむさしに下りし時かまくらにも立寄、
帝都より大樹のおほんもとまで道すがらの名所々々を狂句につらね詞につづけ、老部のさうしとなして、外題を道草といへり、いまだ梓にちりばめぬものなれば、今此物がたりの鎌をひっさげてその道草をかりとるもの也。奥にいたりても名をあらはさざる狂歌発句、みなこの喜雲といふすきものが句なり。

「道草」は前述のごとくすでに正保年間成立していたと見られる。おそらく旧稿「道草」に鎌倉関係の文献をむすびあわせ、「鎌倉物語」は作られたものであらう。「鎌倉物語」には、たしかに自分の目でみ、足であるいた要素と共に「京童」などとは比較にならない、先行書の利用があった。名所一つを語るのに、「東鑑」を引き「発心集」を引き、「長明道の記」を引く、それは本書が机上の教養を、大きな支えとして成立した事情を物語っているのである。説話の引用過多もそれに由来している。喜雲は

洛陽住居を明言し、書肆又京都である。それは都人が、机辺に鎌倉逍遙をなすべく意図された書物であらう。

そしてここにありふれたとはいえ、その数必ずしも少からざる書物が並べ立てられていることに喜雲の用意と教養がうかがわれるであらう。そして「京童」の微かな実用性はいいよ微かになっていったのであるが、「京童」に見られる地誌としての夾雑物（連歌作法、地獄極楽論など）は少くなつて、たとえ説話的興味に筆を費そうとも、その本すじはどこまでも当該名所そのものからはずれなくなっている。それは、喜雲の名所記作家としての成長を意味し、その成長によって完備した名所記としての鎌倉案内記の濫觴を形成しえたのである。さればこそ水府の「新編鎌倉記」の如き正統的地誌が引用書のうちに本書を加え、もって喜雲の眉目とする、柳亭主人の見解もありえたのである。

さらにこの「鎌倉物語」において特徴的なことは、同行者の存在である。鎌倉巡遊の時に実際に同行していたか、それとも文面の上だけのことであるのか、野田氏基春は、全部で六句採録されている。基春は同じ万治二年仲秋中旬に前述の「貞徳百句独吟」を出版した人物。いま手控えを検する余裕を持たぬが、俳人であると共に書肆を兼ねていたものである。「百句」出版のためにはその巻尾の喜雲あて貞徳書簡からおして、喜雲の介在（最少限度にいて）が必要条件であった。同じ万治二年の二書が共に喜雲—基春のかかわりにおいて出版されていることはこの時点における二人の交りの深さを物語るものである。なお巻三に一句のみ入集している重貞は、重頼門といわれる望月重貞ではあるまいか。「知足書留」に重頼との三つ物のある事とからみあわせ、「大系図」にいう「寛文ノ頃五十有余」から、喜雲とかつかつ同世代、

あるいは十年あまりのずれをもつ、雅友と考えるであろう。重貞が果して望月重貞ならば、望月重方の従兄弟であり、その重方は、「跡追」に一句とられていることをこわっておく。

万治二年この年の喜雲の今一つの成果は九月序「私可多咄」の出版であった。この書の咄本のジャンルにしめる意義について、私はいま多くを説く準備がない。たしかに指摘されている通り、家系を語り、旅中の用心を説き、古歌の卅六文字なるをあげる、それは笑話集と、雑記帳の混淆を意味している。しかしその場合も、のり物かく男を六尺というは、のり物の棒一丈二尺を二人で担ぐ、二でわれれば六尺なるがゆえというが如き、今日では笑いを伴わぬ俗語源説も当代では笑いにおいて語られたものであるかも知れない。また、笑いそのものからずれるとしてもたとえば蟻通明神の由来を説くことは、やはりはなしの場に密着してなされたと考えられる。メモ的な記事にも、自己宣伝的な章にも、はなしの呼吸が感じられるであろう。笑いとは何であったかということも問題であろうし、喜雲におけるはなしの意味内容も問題であろう。棠陰比事からと断つての二話にしたところが、ただ、五巻の分量・体裁を整えるために、はめこんだというだけのものではあるまい。それにしてもたとえば「昨日は今日の物語」や「百物語」とくらべてさえ、「私可多咄」のもつ雑然さはいちじるしい。この夾雑物はしかし、「私可多咄」の生命的な部分であるとはいえずぬまでも、生命的なものの支柱ではあった。構成的なものの欠除が、創造的なものを支えたのである。それは「京童」ですで見たところであるが、しかし喜雲一個の個性のみの問題ではなく、仮名草子全般についてもいいうるであろう。あるいは仮名草子を離れてさえ、その上下と横に系譜をひいて、文芸概念の推移な

り、形成なりに投影するものであると思う。

四 「京童跡追」と広島下り

明暦四年翌万治二年と、つづく二年間に三冊の書物を世に問うた喜雲は、その数箇月間の華々しさを忘れたかのように、以後数年間の沈黙を守る。「京童跡追」の序によれば、万治二年中にすでに「田舎わたらひ」をしたもののようである。その田舎とは、いうまでもなく芸州の広島であった。なぜ、いかにして広島に下ったか、その問題はしばらくおき、まず「京童跡追」から話をすすめよう。

寛文七年九月「京童跡追」が出版された。その序に、開版の事情は、ほぼ明かである。何度もふれたように「京童」出版の時、すでに喜雲はその後編をあむ用意があった。しかし、その草稿も田舎住居のためにむなしく函底にあったが、たつてとすすめられていま出版するのだという。しかし巻を繙けば単に「京童」補遺として旧稿をまとめたというだけのものでないことは明かであろう。

巻一と巻二の三十条は京都（近江を含む）、巻三の十五条は奈良、巻四の五条は大阪、巻五の十一条は大阪と摂津の国の寺社、巻六にいたっては、山城の国三寺社のほかに摂津の国の金龍寺、有馬、白滝前をあげ、つづいて、その倍近い分量で安芸の国厳島の条に筆を費しているのである。したがって名は「京童」の「跡追」であっても、巻数からいえばその三分の二ちかいものが京以外の地にさかれているのである。

巻一・巻二の部分は「京童」補遺の利用部分、巻三は「奈良刀」、巻六の山城関係は「赤手拭」のそれぞれの旧稿を利用することによって書かれたものであろう。

その他の、大阪―摂津の名所案内記は、一部の書にまとめ上げるための新たな補筆であろうか。これらすべての動員においてなお事たらぬ喜雲は、厳島の項を加えたのであるが、それには分量の問題と共に、彼がその項目に註したごとく「遠雖^レ隔^二京師^一、開板人依^二所望^一書き加ふ也」というような条件も、まんざらの虚構ではあるまいと思われる。それには広島での売れ行きなり、あるいは京師の読書人の厳島への関心の問題なりが絡んでいるであろう。そしてこの「跡追」のでた寛文七年丁未の年には、喜雲はもうまぎれもなく、「広島^二の喜雲^一」として俳壇に知られていたのである。「跡追」には確言されていないが、この年春正月、谷口重以撰「百人一句」には、広島中川喜雲として採られているのである。そのことは、喜雲の俳壇における声望と地位をあらわすと共に、その勢力圏のありどを示すものである。寛文七年この年、広島^二の俳壇は喜雲^一によって代表されていた。

喜雲の叙述どおりに、彼の広島下りが、万治二年であるとするならば、彼のそのような状況の達成は、すくなくともその表出は、九年目になされたのである。

しかしそれにしても喜雲はなぜに広島に下ったのであろうか。

広島はいうまでもなく浅野藩四十三万石の地、文雅風流も盛んであった。早く石川丈山は元和九年に招かれ翌十年から寛永十三年までこの地の人であったし、藩主長晟は連歌を嗜み元和七年船町天満宮に百韻を奉納し、光晟は又三十六歌仙を寛永十六年奉納、さらに寛永九年加藤家退転により来住した加藤正方に正保元年合力米百石を扶持したという。このような第一文芸の隆盛した地に、では俳諧はどのように行われていたか。広島^二の俳諧^一に関する

資料は貧困であって、「新修広島市史」でさえ、その草創を蕉門十哲野坡の弟子なる風律の時期にみているのである。しかし、内海の要衝、雄藩の府であってみれば、俳諧の育つ機運は十二分にあった。すでに「俳諧作者名寄」に「安芸広島為時」の名がみえている。その余裕はいまないが、博搜すれば広島^二の俳諧史^一の書き直しも可能であろう。喜雲の広島移住のごとき、その著しい例である。そしてそのことは、いま一つの町人文芸狂歌においてもいえる。広島狂歌史は貞柳門の芥川貞佐（一六九九―一七七九）にはじまるとされているが、すくなくとも喜雲までさかのぼりうるであろう。喜雲が移住したであろう万治二・三年の交は、広島藩としても、最も活発な時期であった。寛永十五年と正保三年の検地で打ち出し高三万四千石、新田開発に一万七千二百八十石（寛文四年に届出た高）をえ、あわせて五万石、三次藩分知による減小分を補うに足り、藩体の整備はほぼなろうとしていた。そのことは文教、厚生^二の面^一でもうかがえ、儒学・医学の面においても、長期間の人材登用が活潑であった。「新修広島市史」によるに京の名家黒川道祐聘せられ「芸備国群志」を寛文三年に編んだことなど、この期の顕著な出来事であろう。やや下って綱長は春齋門の津村久敬、崎門の植田成章、味木立軒、寺田臨川を登用し堀正脩にも接するなど、喜雲在世中に限っても、好學の風いちじるしいものがあつた。とりわけ、医学と医師への関心は無視できない。すでにあげた黒川道祐は「本朝医考」の著者、当代の大医であり、延宝年間には喜連元真、江戸水庵、竜神次郎太夫らが地元から登用せられ、特に貞享二年尼子道竹が徳島から百三十石で招かれ田島玄格・山形養仙ら百三十五人の医師を伴って移住したことは空前ともいふべきことであつた。徳昌庵法印慶雲（水野慶雲の

ことという——中村教授示教」の弟子（「私可多咄」）たる、医師。中川喜雲の広島移住も、この線で考えられるであろう。そしてその「田舎わたらひ」が案外長くすくなくとも貞享までは確実につづいたことの原因も、この辺にあるようである。

医師として俳諧師としての喜雲の広島移住は十分に報われるところがあつたであろう。以後の彼は後述の如く名鑑的な俳書に、広島の代表者として採られるのであるが、それは彼の移住の賢明さを物語るものであろう。もし京住をつづけるならば、数多くの点者・作者の中に埋もれることも十二分に考えられることであつた。そしてこの「跡追」巻四の天満天神の項における前引の「四季をもわかつた、作者も次第不同」なる発句集は、じつは彼の勢力圏の誇示でもあり、一門の撰集がわりの役を果すものでもあつた。採録人数百二人は、著名俳人と無名俳人とに二分され、前者の側には、

貞徳・立圃・令徳・西武・貞室・重頼・重方・宗恵・恵佐・梅盛・政信・道節・玄札・未得・正式・幸和・休甫

らが、後者の側には、

友之・正永・芝也・豊永氏種名・佃元清・松氏近満・釣翁・曾根氏紹休・小浜氏勝白

らが入集しているのであるが、前者の側は、ほとんど一句で（貞徳・貞室のみ二句である）あるに反し、後者の側では加々爪氏安辰五句、夢幻六句の入集は例外としても、二句の作者は六人を数えるのである。その多くの経歴を辿りえぬが、たとえば長崎次昌・長崎田玄・三次宗利・岩国虎佐さらに大阪の二俳人などはその冠する地名自ら喜雲の交際範囲を物語るもののごとく巻六の敵島紀行の編入も、このような喜雲を支える基盤を抜きには考えられ

ぬであろう。そしてここに敵島紀行を載せたことは、どのような裏面事情が働いているにせよ、まさに時宜をえたものの、小島常也が元禄十年「敵島道芝記」を出版するまで、この地を語るものは、他になつたのである。

以上列举したように「京童跡追」には多くの問題があつた。そしてその問題の存在自体、実は「跡追」の内容と形式の不統一なり未整備なりを物語るものである。それはほとんど一部の書としての体をなさぬまでの混淆である。「京童」から「鎌倉物語」へ喜雲の示した成長は、十年の田舎わたらいによって帳消しになつたのであろうか。たしかにいかに優待をうけようとも、京師を離れ芸州の地にあることは、そのうける刺戟からいっても大きいへだたりがある。丈山が二千石の高祿を固辞して帰洛したことの裏にひそむ、田舎住居の安逸がもたらした才能の鈍化でもあろう。

旧稿の、これは徹底的といつてよい利用、それは過去の畜積をいまや費い果そうとする喜雲の、滑稽に近いあがきかも知れないのである。事実、喜雲は、これ以後、目覚しい活躍はしない。ただ広島の代表的俳諧師として、延宝四年の「古今俳諧師手鑑」天和二年の「高名集」等に、「百人一句」以来の「うへさしや月の弓いるうつは草」がとられて、その地方俳人としての存在を示すのみである。

あれほど劃期的であつた名所記も、又咄本も、喜雲は忘れてしまったようである。いや喜雲が忘れたのではなく、書肆が忘れたのかもしれない。いや播磨の是誰、備前の胤及、それぞれに中央俳壇に深くかわりをもちつづけたことを思えば、これはやはり喜雲の才能の問題であらう。あるいはまた小成に安んずる、心奢りの悲劇でもあろうか。

五 二本の「都案内者」

天理図書館蔵本「新案内者あたとをひ京すめ全」五巻は、寛文十一年病月

— 12 —

12 松	11 天	10 法	9 嵯	8 小	7 清	6 愛	5 高	4 仁	3 妙	2 廉	1 大	卷	13 岩	12 鞍	11 貴	10 比	9 大	8 下	7 上	6 白	5 百	4 吉	3 新	2 永
龍尾寺	輪寺	倉峨山	倉峨山	倉峨山	倉峨山	倉峨山	倉峨山	倉峨山	倉峨山	倉峨山	倉峨山		布屋	付元三大師	叡山	糺原	賀茂	賀茂	賀茂	萬河	萬河	田山	黒山谷	觀堂
○六の一	○六の六	○六の一〇	○六の五	○六の四	○六の三	○六の一	○六の二	△二の一〇	△二の八	△二の六	△二の七	四	○五の四	○五の一	○五の二	○五の七	○五の六	○三の八	○三の七	○四の二	○三の一	○四の一	○四の三	○四の四
												11 八	10 光	9 山	8 大	7 水	6 鳥	5 大	4 西	3 羅	2 東	1 壬	卷	13 太
												幡	明寺	崎野	原野	藥師	羽恋塚	通寺	生門	生門	生門	生門		秦
												○四の一	△六の一	○四の二	○四の二	○四の二	○四の二	○二の一	○二の一	○二の一	○二の一	○二の一	五	○六の一

したがって「京童」からとられなかったのは次の項目である。

卷一 腹帯地藏 蛸薬師 四条河原 目病の地藏 産寧坂 子安

卷二 新玉津島 傾城町

卷三 西方寺 紙屋川 平野 本満寺

卷四 伏見

卷五 僧正谷 醍醐 鼠禿倉 日吉 湖

卷六 野の宮 大井川 嵐山 梅の宮

「京竜跡追」の関係部分では次の通りである。

卷一 大炊道場 妙伝寺 御所八幡 栗田口神明 安祥寺 関

明神 三井寺 智積院

卷二 釈迦堂 新住吉 実相寺 妙蓮寺 元三大師 比叡山

妙泉寺

卷三・卷四の全巻・卷六の撰津・安芸関係の全部。

そしてその挿絵も友人植谷元氏に依頼して確かめたのであるが如く、ただし「案内者」においては、空白余白の部分に（道路とか水面の部分）、二本ずつの横線を数本乃至十数字加えることをそのいちじるしい特徴とする。（絵の作者については立圃説・吉田半兵衛説などあるが、まだ十分考えていない。）そして偽版である本書によつてはじめて、京都の名所案内記としての首尾一貫性を示しえたことは喜雲にとつて皮肉であるといわねばならぬ。

第一にそれは四条河原や傾城町を削った。その理由は、寺社の案内記とそ十年二十年変化なくしてありえても、流行の変遷甚しい悪所の旧稿を、新刻をよそおう書物にさすが加ええなかったであろう。第二にそれは、たとえば「京童」の「湖」のごとく長

々しい、案内記としての必然性のないものを削った。もちろん、連歌論や薬の効能など話の中におこまれているものは削りのこされている。第三にそれは、例外はあるとしても、筆を洛中とその周辺にのみかぎり、たとえば江州の名所をとらなかった。

このような諸特徴は、喜雲の旧作二編が共にになっていた雑多性、不純性からの脱却を意味すると共に、かく整理された形態のほうに、名所記としての出版には望ましい、そのような出版界の動向を示しているのである。喜雲的な名所記、趣味的低徊的名所記はもはや過去のものであった。いたるところで作者も遊び（名所記の埒から出て）、読者も共にその遊びに誘われる、爽雜物にこそ読物の生命があった、そんな時期はすぎようとしていたのである。もちろん、ここで当然、上方版と江戸版の差について考えねばならないであろうし、また、喜雲旧著の再版時期とその書肆についても触れるべきであろう。しかしいまはそれらを他日の問題として残しておく。

たとえば寛文五年の「京雀」などは、実用性へ傾斜する名所記から、地誌への動向を端的に示すものであった。文芸的な飢渴は、名所記などでみたされるよりも、もっと直接的なものと適切なものが、用意されていた。すくなくとも、名所記も純度と節度を保たねばならなかった。名所と俳諧の結合にしながら、寛文二年の「旅枕」のような、単純化された形もすでに出ていたのである。喜雲的放恣は、やはり前代のものであった。何よりも「都案内者」が、「新京童」でも「続京童」でもない、「あとをひ京すすめ」であることには、名所記・地誌ジャンルにおける、喜雲的なものの無残な敗北を物語るものである。了意の鮮やかな転進は、やはり彼が王城の地にあって、書肆などと密接につながり

えたことと関連があるだろうか。

このように見来れば「都案内者」は喜雲の著であって喜雲の著ではない、奇妙な著述ということになるが、しかし、いわゆる喜雲著「都案内者」が本書である、本書でしかないという保証はどこにもない。「俳書集覧」所収俳諧略史附載「俳諧年表」は寛文二年の条に、「都案内者中川喜雲」とその出版を伝えている。この記事が正しいとすれば、本書に今一版あった、さらには本書寛文十一年版は二年版ののちずりであったということにもなる。そうすれば寛文七年の「京童跡追」巻一、二などが、むしろそれを利用したということにもなるが、しかし、この年表の記事の信憑性がどの程度であるか、その裏づけなきかぎりにわかに信じがたい。むしろ「都案内者」に二本ありとする考えがここから可能であろう。寛文二年版の「都案内者」と十一年の「都案内者」、その考えも実は新しいものではない。「大系図」中川喜雲の項に「都案内者二本」としているのである。さらに種彦が、「又案内者に馬路祭りの事を載たり」とかいているが、天理本の「案内者」には馬路祭りのことはまったくない。「近代著述目録」後編に「都の案内者二」とあり、これが二冊の意味ならば、冊数においても相違がある。そうすると、未見ではあるが、「案内者——都案内者」に、いま一種別本があること、「馬路祭り」のことをかき、冊数は二冊、寛文二年出版の都案内者の存在することを、ほぼ肯定してよいのではあるまいか。寛文書籍目録には喜雲著書の間に八冊本の「都物語」がはさまれて、その著者を暗示するものようであるが、このことについては他日にまちなう。

ともかくこの年寛文十一年以後の喜雲の動向について私は暗い。彼が何時まで広島にいたものか、その死は広島でか京都で

か、そんな基本的な問題についても何ら明めえなかった。

宝永二年と諸書にその死を伝える。すでに享年について疑ったからには、この没時についても疑いうるのではあるまいか。それともこの宝永二年のみは確実なのであるうか。かつて功名心に燃えた青年、先祖の栄光の記憶を、せめて風雅の道でもたしかめ直そうとした青年、その意欲も、しかし、ある意味では満されたというる。「都案内者」を含めて五種の著述に、虚名のみは一時代を止めたであらう。事実、俳諧では寛文から天和にかけて、ともかくにも広島、安芸の国の覇者であった。十年一日の如き「うハさしや月の弓いるうつほ草」、貞門・談門さらには蕉風への変転も、彼にとっては「紅旗征戎」であったのだ。したがってその死の床に悔恨と敗残をのみ思うのは私一個の感傷であらう。通説の如く七十であれ、はた小見の如く八十さらには八十以上であれ、その死は案外みちたりたものであったかも知れない。

彼の著作には、以上であらう辿って来たものの他に、なお「近代著述目録後編」は、次の三種を加えている。

土佐名所記 女筆往来 我家艸

そのいずれも未見であるが、いかがであろうか。

「土佐名所記」は天和元年の「新撰書籍目録大全」にいう「同名所記」を指すものであらう。天和の書目には次の如くある。

一 土佐日記	貫之道記	九 匁
二 同季吟抄		三 匁五分
三 同附注	林春徳	四 匁五分
一道中付		三分
一同俳諧入		八分

一同 大全 壹匁五分

六 同名所記 中川喜雲 六匁

しかしこの「同」はその意味が必ずしも明瞭ではない。「土佐」の字は「道中付」で一応切れるようである。では、この「同名所記」とは一体何を指すものであるか、喜雲著の六冊本といえ「京童」「京童跡追」の二部が当るが、そのいずれかを「、名所記」と称しそれが、いろは別の「と」の項にまぎれたものであるうか。それとも「道中名所記」六冊が、別に存在するのであらうか。「女筆手本」は一冊本として「寛文書籍目録」にもみえ、「新撰書籍目録大全」にいうあたひ九分の一冊本「女筆」もおそらくそれであらう。そのいずれにも喜雲の名は記されていない。

喜雲の子の引牛は又俳諧点者であった。元祿四年の「俳諧京羽二重」に、「丸太町通新町西へ入町」引牛が句として「青梅はよく味はへはすけもなし」がとられている。同年の「京羽二重」批評書「俳諧貞徳永代記」が、「判云、此句は何のきゝ所もなし。狂歌の上の句也」と軽くいなしたものである。引牛については、「俳諧家譜」「大系図」それぞれに、喜雲の子、元祿年中の点者、没年不詳とするのみであって、二流の人の子の、二流にさえ達しえなかったことを示すものようである。

以上ははじめにことわったように、中川喜雲についての覚え書きに止まる。二流の人への探究が、二流の論でさえありえなかった責任は、いうまでもなく私の負うところ。擱筆にあたって、諸氏のご高教に改めて謝意を表する。

— 本学助教授 —